

中国のほんの話(58)

竹内好『中国を知るために』

～ 惻隠の情なしには正確な中国認識は得られない～

蔭山 達弥

香港人活動家らによる尖閣諸島上陸により、わが国と中国の双方の国民感情に再び小波が立ちはじめた。活動家の船に同乗し、過熱を煽った香港のテレビ局の報道姿勢も要因の一つであるが、瞬く間に中国各地に広がった「反日デモ」が一部暴徒化した映像を見ると、このようなことが一体何度繰り返されるのかと、正直うんざりさせられる。今回の事件で、両国民が短絡的に相手側を敵視することは、絶対に避けなければならない。

今から約50年前、1963(昭和38)年2月、雑誌『中国』を中国の会編集として、発行した竹内好は「中国を知るために」という題で連載を始めた。竹内好は連載第7回で、日本が敗戦を迎えた1945(昭和20)年まで日中関係を象徴的に言い表す言葉として一番頻度が高かった「同文同種」という言葉を取り上げる。竹内好は言う。「私は(あるいは私たちは)この「同文同種」というコトバが大きらいだった。うすよこれた、不潔な感じがして、自分が使えなかっただけでなしに、人が使うのを見ても、その一語でその人の学問はおろか、人格までも軽蔑してしまった。同文同種観に反撥することを通じて私たちは学問形成をおこなってきた。」竹内好はさらに続ける。「同文意識の元にあるのは、日本語が、発生的には文字を、漢民族の発明した文字である「漢字」から借りているという事実である。」漢字—漢語—漢文—漢学、ひっくり返って漢文化というものがある日本に根強く生き残り、それが禍になっていることを実例で示し、「日本の文字が日本の文字として独立すること、それによって日本人の思想が独立すること、これが日中関係の改善にとって一つの前提でなければならない。そうでなければ対等の友好関係は樹立されない。」と結論づける。

『中国を知るために』第16回「流れた「支那」論争」のなかで竹内好は一つの仮説を立てる。「…人間の集団についてイメージをつくる場合に、国のイメージを先行させるか、それとも人間の集団=民族のイメージを先行させるか、ということだ。日本人は前者の型、中国人は後者の型であって、その溝は容易に埋められないし、したがって、相互理解も容易には成り立たない。(中略)したがってまた、実践目標としては、日本人の国家観の固さを内側からくわいていくのでないと、中国認識の前提が準備されないことになる。中国人のいう「中国」と日本人のいう「中国」とは内容がちがうのだ。これ



は中国人のいう「日本」と日本人のいう「日本」との内容がちがうのとパラレルな関係にある。もう少し説明を加えると、中国人にとって国家とは、選ぶべきものである。選んだ経験があるし、将来も選ぶという考え方が習性化している。しかし、日本人にとっては、国家はほとんど自然の所与だ。いや、国体という固い物体とほとんど同一化されている。そして、その心的傾向にもとづいて、外国を見ようとするめきがいがある。」竹内好が言うように、大陸の中国人にしる、台湾の中国人にしる、香港の中国人にしる、さらには海外で暮らす中国人にしる、彼らは自分で国家を選んだ、という自覚は持っているだろう。彼らは中国というネーションとして統一されているのだ。そう考えると今回の香港人活動家の一件は理解できるのではないか。

『中国を知るために』第18回「名を正さんかな」で竹内好は日本の訪中代表団が、中国の指導者と会見した時のことを例にあげる。「あなたがた(中国人)は、過去を忘れようという。その好意はありがたいが、われわれ(日本人)は、自分の国が中国を侵略した過去を忘れることはできない。これにたいして、相手(故・廖承志中日友好協会会長)は、日本代表の手を握ってそれで会話が完結と言ったそうだ。」竹内好はこの会話が「中国を知るために」の出発点だと言い、「つまり惻隠の情だ。相手の身になって考えるということだ。」と主張する。

惻隠の情は孟子の性善説(人の本性は善だ)にかかわる重要な言葉である。『孟子』公孫丑篇上に言う。「人にはみな、人に忍びざるの心あり。」「人に忍びざるの心」というのは、他人の不幸や苦痛を見ずごしにはできない同情心を意味する。中国に限らず、外国を知ろうとする者は、相手の身になって考えてみるということが常々必要ではないだろうか。

かげやま たつや(教授・中国文学)